

## 演題名：病理学的に“石灰沈着を伴うびまん性神経原線維変化病” が疑われた高齢女性例

所属および演者名（発表者に○）：

愛知医科大学加齢医科学研究所 ○三室マヤ，吉田眞理  
福祉村病院神経病理研究所 橋詰良夫

症例：死亡時88歳女性．高血圧症と急性腎不全の既往あり．88歳時に自宅で転倒して左大腿骨転子部骨折し入院，外科的加療を受けた．術後，腎不全が遷延し，血液透析を2回施行された．頭部CT上，前頭側頭葉の萎縮と，淡蒼球・被殻・小脳歯状核の石灰沈着を認めた．独居で詳細な病歴は不明だが，入院前までADLは自立しており，明らかな認知症は認めず，入院中も特に問題行動などはみられなかった．2ヵ月後，消化管出血を認め，全身性けいれんと高浸透圧性非ケトン性昏睡を併発し死亡．

病理所見：脳重1030g，肉眼的に前頭葉・側頭葉の萎縮は軽度であり，組織学的には，側頭葉極に神経細胞脱落とグリオシスを認めた以外は，海馬を含め大脳皮質の神経細胞は保たれていた．扁桃核や海馬など辺縁系を中心に神経原線維変化（NFT）が出現しており，ghost tangleやneuropil threadも認められた．黒質や青斑核にもNFTを認めたが，視床や基底核にはほとんどみられなかった．Tauの免疫染色では，NFTに加えて大脳皮質や白質のグリア内に陽性構造物を認めた．大脳皮質・白質，基底核，小脳皮質・白質・歯状核の血管壁に石灰化を認めた．老人斑やアミロイドアンギオパチーの所見はなく，Lewy小体も認めなかった．

考察および問題点：本症例は，辺縁系を中心にNFTとghost tangleが出現し，基底核や大脳皮質・白質・小脳に石灰沈着があり，老人斑がみられなかったことから，病理学的にDNICであると考えられた．しかし，88歳と高齢で，臨床的に明らかな認知症やパーキンソニズムは指摘されていないこと，病理学的にも前頭・側頭葉の萎縮が軽く，NFTの出現量も比較的少ないことがDNICとしては非典型的であり，DNICのスペクトラムを考えるうえで重要な症例であると考えられた．

(演題名)

Diffuse neurofibrillary tangles with calcification (DNFC) in an old woman without evidence of dementia

(演者名)

Maya Mimuro<sup>1</sup>, Mari Yoshida<sup>1</sup>, Yoshio Hashizume<sup>2</sup>

(所属名)

1 Dept. of Neuropathol., Instit. for Medical Science of Aging, Aichi Med. Univ.

2 Instit. of Neuropathol., Fukushima hosp.